

遺跡現地の活用の促進

—平城宮跡の活用に関する実践的研究—

1 はじめに

特別史跡平城宮跡では、平成30年3月24日に供用開始した「国営平城宮跡歴史公園」の「朱雀門ひろば」を中心に観光利用をはじめとする活用事業が様々に実施されている。このような状況下での研究所としての平城宮跡における活用の取り組みの在り方について、令和元年度に所内研究会（以下、研究会）を開催し、検討をおこなった。研究会では、今後の持続可能な取り組み体制の構築を視野に、所内の部課を横断して情報収集や意見の吸い上げをおこなった。

2 現在の活用状況と奈文研の役割

今日、文化財の活用は、教育・普及のみならず、まちづくり、観光振興を目的とするものまで、多様な実態を呈する。研究会では、平城宮跡における奈文研の役割を踏まえ、改めて奈文研が取り組むべき「活用」の範囲はどこまでなのかを共有する必要があった。

平城宮跡において現在実施されている遺跡現地での活用事業の内容を整理すると、大きく1) 遺跡博物館（主に教育・普及）としての活用、2) 公園緑地としての活用、3) 観光・交流拠点としての活用、とに分けられる。平城宮跡の活用に関わる組織は、国営平城宮跡歴史公園（国土交通省および平城宮跡管理センター）、管理団体としての奈良県の各部局、奈良市各部局、NPO法人平城宮跡サポートネットワーク等複数存在し、これらの組織の専門領域を踏まえて活用事業を企画することが肝要である。

そこで研究会では、平城宮跡における「文化財の調査研究・技術開発等の主体」である奈文研が担うべき活用の範囲は、1) 遺跡博物館（主に教育・普及）としての活用であると設定した。その上で、屋内展示施設における展示等とのシームレスな関係性を持たせつつ、今後はこれまで手薄であった屋外、遺跡現地での活用を対象に企画立案をおこなっていくこととした。

3 中期計画案

具体的には、平城宮跡現地での現状の課題を鑑み、三



図44 「AR幟旗」により遺跡現地に再現された幟旗

つの柱を立てて、次期中期計画を含む今後6か年の計画を立案した。

I. 復原建物のある空間における歴史的文脈に基づく体験の提供

「活きた歴史体感」は文化財の活用における今日的な課題である。平城宮跡においては、既に「特別史跡平城宮跡保存整備基本構想」（1978）に、「古代都城文化を体験的に理解できる場とする」と示される。遺跡現地においては復原建物のある空間等のハード整備のほか、そこを舞台に催物を実施することで、全感覚的な理解ができるようにすることが理想とされ¹⁾、現在まで天平祭をはじめ、第一次大極殿院地区・朱雀門前等において、往時の雰囲気味わう催しが実施されてきた。いっぽう、同じく復原建物のある空間である、宮内省地区や東院庭園地区での実施は少ないため、これらを会場とする活用プログラムの構築を目指した。

II. 遺跡現地と、遺物・情報の関係性の再構築

現在、平城宮跡の遺物は、活用拠点施設である平城宮いざない館や平城宮跡資料館、遺構展示館等に展示されているが、遺物と遺跡現地との関係については、解説板の整備とボランティアガイドによるツアーガイドの解説のみに頼っているという課題がある。この課題の解決のため、システム構築とコンテンツ製作の二つの方向から作業を進めることとした。システム構築では、既にある調査成果のデジタルデータを対象に、デジタル端末を利用した情報提供システムの整備を段階的に進めていくこととした。コンテンツ製作では、特に遺跡現地に関する情報提供の少ないエリアを中心に解説シート等を作成し、これを作る過程で集められた資料等をデジタル端末へ装備していくことを想定している。

III. 遺跡のある地域との関係性の再構築

平城宮跡は全国各地とつながる歴史を有し、木簡や土器をはじめ、地域との関係性を示す遺物が多数出土している。しかし、活用拠点施設において展示するほかに、各地と連携した取り組みは、後述の赤米献上隊の受け入れ事業以外には、あまり実施してこなかった。全国の都城関連遺跡で



図45 リーフレット「大嘗宮」

は、その活用に苦慮しているケースも多いことから、赤米献上隊をヒントに、史実を通じた地域間交流・地域学習を目的とする教育旅行等の受け入れ事業の構築を目指すこととした。

4 令和元年度の活用実践

研究会で議論・企画立案を進める一方、活用の実践として改元即位の年を記念した即位関連遺構を紹介する取り組みと、赤米献上隊の受け入れ事業をおこなった。

「AR幢旗」の製作、体験会の実施 第一次大極殿院における幢旗遺構の検出地点に、幢旗の原寸大CGモデルが立ち上がるARアプリケーションを製作した。近年、復元建物に代わる遺跡の上部構造を直感的に捉えることのできる手法として、AR技術を用いたアプリ開発が盛んである²⁾。今回は労力・費用についてローコストな中で一定の効果が得られることを意識し、既に展示物として製作していた幢旗の1/3模型を元にCGモデルを製作することでコンテンツ製作の手間を削減し、また一般供用ではなく特定の端末に、ARの機能に特化したアプリとして搭載することでコストを削減した。

令和元年11月9日に開催した第125回公開講演会に併せて実施した体験会では、講演会参加者等105名の参加を得た。94%の参加者がARは平城宮跡を理解するのに効果的だとするアンケート結果が得られたが、これはARの体験のみならず、研究員がその場で解説をおこなったこと、第一次大極殿内部で1/3模型の実物を展示していたことなどによって、AR体験の深度が深まったことが大きな要因となっているという感触があった。

リーフレット「大嘗宮」の作成 同じく即位関連遺構である、東区朝堂院に存在する大嘗宮遺構を紹介するリーフレットを作成した。所内の各部を横断して、進行・調整／解説文・復元イラスト作成／レイアウト作成の各担当者を定めたことで効率的に作業が進み、今後の所内での体制構築の足掛かりを得られた。大嘗宮の遺跡現地での具体的な取り組みには至らず課題として残るが、令和



図46 養父市八鹿小学校の赤米献上隊

元年が改元即位の年であり秋に大嘗祭がとりおこなわれることが共有されていたことにより、新天皇の大嘗祭が迫る9月、文化庁により東区朝堂院現地にて草刈および遺構表示舗装上の堆積土除去工事がおこなわれた。そして国営平城宮跡歴史公園のいざない館では、即位記念展示「奈良時代の即位式と大嘗祭」（期間：10/19～12/27）のパネル展示が実施され、より詳細な解説を求める来訪者にリーフレットを届けることができた。平城宮跡全体として、他機関との情報共有を通じた緩やかな連携のもとで遺跡現地への来訪を促す取り組みとなった。

赤米献上隊の受け入れ 平城宮跡で但馬国養父郡小佐地域から赤米五斗を平城宮に収めたことを示す木簡が出土したことに関し、兵庫県養父市八鹿小学校の児童が自分たちで栽培した赤米を平城宮跡に持参する取り組みの受け入れ事業をおこなった。養父小学校では地域の方々の協力のもと、田植え・稲刈り・感謝祭・わら細工づくりなど赤米づくりの体験活動をおこなっている。10月10日に6年生が赤米を持参し、平城宮跡資料館にて贈呈式をおこなった。役人に扮した研究員がこれを受け取り、木簡に関する解説したあと、出土した木簡を見学する時間を設けた。自分たちの活動のきっかけとなった長さ約28cmの木簡の実物を前に、「思っていたより小さい」などと驚きの声があがった。出土遺物が現在の地域間交流を促すことを実感する好機となった。

5 おわりに

今年度の活用実践を通じて得られた見通しを踏まえ、今後も研究会で遺跡博物館として活用の在り方を模索しつつ、実践を通じて効果的・持続可能な活用プログラムおよび体制の構築を目指し、全国の遺跡の活用資成果として報告していく。

(高橋知奈津・内田和伸)

註

- 1) 文化庁『平城遺跡博物館基本構想資料』1978。
- 2) 奈文研『デジタルコンテンツを用いた遺跡の活用 平成27年度 遺跡整備・活用研究集会報告書』2016。